

# Foreword 卷頭言

## 堀場雅夫賞創設に思う



石田 耕三

Kozo Ishida

株式会社堀場製作所  
取締役副社長  
工学博士

2003年のHORIBA創立50周年において、堀場社長は21世紀を切り開くグローバルで新たなコンセプトを持つ中央研究所の設立を目指す宣言を行った。中央研究所の設立という大きな慣性質量を持った対象を動かすことの困難さを感じていた中で、その実現を図るための大きな力が堀場雅夫賞の創設で与えられた。この大きな物体に初速を与えるに十分なエネルギーを得たといえる。

HORIBAは、創立50周年を記念する開発テーマを企画して製品開発を行ってきた。本誌には、堀場雅夫賞の受賞論文と審査委員の講演抄録の他に、50周年記念製品に関する論文を多数掲載している。50周年期間にどのような製品を開発し、それらの開発にどのようなメンバーが活躍したかを記録として残したい、また、広い製品分野にわたるHORIBAの開発状況を一覧できる形で公開したいとの思いからである。

1990年に創刊したReadoutは、「分析計測技術は本来、ユーザすなわち、あらゆる分野の先端研究開発やものづくり現場の人達が、仕事を進める上での基本となるものである。そのため、分析計測装置の生産と販売を生業にしている我々は、持っている基礎技術や応用技術、そして製品に関する情報を積極的に世の中に発信して理解を頂き、その上でご批判やご要望を得たい」との思いから、『ユーザとのかけ橋』を目指したものである。

---

Readout創刊以来の15年を振り返ってみると、世の中は自然科学の大きな進展、飛躍的な技術進歩があったが、その縁の下には、必ず分析計測技術の発展とその応用解析技術の革新があった。とりわけ、2002年における小柴昌俊博士のニュートリノの観測によるノーベル物理学賞、田中耕一氏とDr. John B. Fennによる質量分析装置のイオン化法、及びDr. Kurt Wüthrichの核磁気共鳴法によるタンパク質解析法に対するノーベル化学賞の受賞は、いずれも先端自然科学の研究や先端技術開発分野での分析計測技術、装置開発の重要性を、政府、大学、各研究機関に認識していただく機会となった。更に、堀場会長の積極的な政府機関への働きかけもあって、この分野に大きな国家予算が当てられることになった。

そして、まさにこのような機を得た時期に分析計測分野で活躍され、嘱望される研究開発者を対象とした堀場雅夫賞が創設されたことには大変意義深いものがある。

---

「科学技術の進歩にとって欠くべからざる分析計測技術は、その重要性と高度な技術を必要とする割には一般社会ではもちろん、学界でもその存在は大きなものではなかった。そのような分析計測分野での基本を確立し先進的な分析技術を明らかにしようとしている学究の徒に、少しでも勇気を与えることができれば。」と、会長自身はその思いとして述べているように、多くの分析計測技術開発に携わる研究開発者の皆様を、大いに奮い立たせるに十分な賞の創設となったことに、深く敬意と感謝の意を表したい。

---

昨年10月、「第1回堀場雅夫賞」は、HORIBAの原点であるpHに関連する研究者3名が受賞された。受賞論文は陶 究氏の「電位差法による超臨界水溶液のpH測定装置の開発」、杉本直己氏の「DNAをセンシング素材として用いた細胞内pH測定法の開発」、下島公紀氏の「ISFET-pH電極を用いた海洋の現場計測用pHセンサの開発」であって、この3氏の研究内容は、改めてpH技術の原点に戻り、その技術の奥深さに触れる機会となった。更には、pH計測技術が最先端研究分野でいかに重要な役割を担っているかを学ぶ貴重な機会となったことを、この分野の開発に携わる技術者はもちろんのこと、多くの皆様が感じられたと思う。

---

創業60周年にあたる本年、「第2回堀場雅夫賞」は、環境、プロセス計測や自動車排ガス測定装置にも応用されている非分散赤外線吸収分析法や赤外線分光を用いた分析計測技術分野、あるいはその基礎技術研究分野で活躍している研究開発者を対象に予定している。

堀場雅夫賞の主旨が、国境を越え同じ思いで研究、開発に打ち込んでいる研究開発者にも届き、多くの参加者そして受賞者が輩出することを期待すると同時に、この賞を積み重ねることで多くの研究者の輪が広がり、グローバルなHORIBA中央研究所のイメージを膨らませ、その骨格を作ってゆけるものと考えている。そして、その中から世界の発展に役立ち、分析計測技術の革新に繋がる多くの成果が生み出されてくるものと期待している。